和光新校準備委員会（第３回）　議事録

１　日　時　　令和５年１１月２４日（金）　　午前１０時開会
　　午前１１時５０分終了

２　会　場　　県立和光国際高等学校大会議室

３　出席委員　　依田委員長、鈴木副委員長、柴﨑副委員長、中川委員、羽田委員、
　　佐藤委員、柴田委員、山口委員、布川委員、重田委員、廣川委員

４　事務局　　魅力ある高校づくり課　栗藤、中島、坂本、髙辻、橋本

５　協　議　　「和光新校（仮称）基本計画（案）」について

依田委員長　それでは次第２、協議に入ります。まず、協議に当たって事務局から資料の概要について説明をお願いします。

事務局　（資料の概要について説明）

依田委員長　資料の概要について説明がありました。それでは、【資料１】和光新校（仮称）基本計画（案）について、事務局から説明をお願いします。

事務局　（和光新校（仮称）基本計画（案）について説明）

依田委員長　今、説明がございましたが、いかがいたしましょうか。とりあえず皆様から御質問、御意見をまず伺ってまいりたいと思います。大分長い説明でしたので、少し時間を置いたり区切ったりした方が良いかもしれませんが、まず聞いてみたいと思います。各委員の皆様から御意見、御質問があればお願いします。はい。重田委員、お願いします。

重田委員　たくさんあるのですが、全体通してお話してよろしいでしょうか。

依田委員長　お願いします。

重田委員　まず、１の⑴、対象校の特長を生かし、生徒にとってより良い教育環境の整備に取り組みとあります。対象校の特長を生かしとなっていますが、これは和光国際高校の特長は生かされていますが、和光高校は全く生かされていません。どこにも生かされていません。それがまず一つ、問題です。それに関連して、⑶に、生徒や保護者のニーズに応えられるようとありますが、ニーズに応えていません。これがまず一番大きな問題点です。それから、２の⑵に、全日制で普通科と国際関係に関する学科として国際科となっています。また、⑶に普通科 240 人、国際科 80 人、６クラスと２クラスかと思いますが、ここを、対象校である和光高校のレガシーを持ってくるというのであれば、ここに加えて、少人数科というのを３クラスくらい増やしたらどうかと思います。そして普通科を２クラスくらい減らすと。この校舎がそれで使えるのかという問題はありますが、それが言えるのではないかと思

っております。それから、全部まとめて言ってしまいますが、⑷に、令和６年度と７年度に和光国際高校に入学した生徒が令和８年度から新校の生徒になるということはよろしいかと思いますが、令和８年度に新校に入ってきた生徒と、それまでの令和６年度、７年度の生徒と、制服は違うのかどうか。新しい制服なのか、混在するのか。それも知りたいですし、また、校歌はどうなるのか。例えば、６年度の生徒がその３年後に卒業式を迎えたときに、和光国際高校の校歌を歌えないのか。谷川俊太郎さんの立派な校歌があるのに、新校ではもう歌えなくなるのか。この辺をどう考えているのかということです。それから、続けていきますが、校名に関しては、いろいろな案があるのでしょうが、国際科と言うのであれば、和光インターナショナル高等学校とか、この場所柄を捉えたら、和光パークサイド高等学校などがあるのではないかというのが、私の考えです。それから、生徒募集が一番問題だと思うのですが、偏差値が、和光高校と和光国際高校では大分違いますよね。和光国際が普通科 63 と外国語科 64 くらい、和光高校が 40 と違うので、和光国際は普通科と外国語科で多少の偏差値の違いはありますが、そこに 40 の和光高校を持ってきても一緒になれないと思います。先ほど、面接制度がその翌年度からできるというお話がありましたが、その辺をどう加味していくのかということですね。あとは、生徒募集に付随したことですが、もし、今のままのスタイルの学校で進めていったときに、今、和光高校に入ってきているぐらいの子たちを完全に見捨てる、切り捨てる感じになってしまいます。そんなことで良いのかということですね、教育として。こんなことであれば新校をつくる意味がないと私は思います。それから、細かい点ですが、７の⑵で、統合後の各種証明書は新校が発行するということで、それはそれで良いと思いますが、今、私が思っていることは、どうしてもこのままのスタイルで新校を進めるということであれば、和光高校は廃校にしてもらった方が良いと思います。このままでは単なる和光国際高校の焼き直しです。外国語科という名前が国際科に変わっただけで、なんら今と変わっていません。であれば、和光国際高校は 36 年くらいあるのでしょうか、その学校の歴史を潰してまでやる必要はないと思います。そのままの和光国際をこのままのスタイルで進めていけば良いと思うのですが。あと、その後の同窓会はどうなるのかとかそういったことは、私は引き継がない。独自でホームページを作ったりしてやっていこうと考えております。あと細かい点はたくさんありますが、重要な点は、最初に申し上げました、和光高校のレガシーがどこにも生かされていないということで、その和光高校に来ている層の生徒たちを切り捨てるのではないか。ではどこで受け入れるのか。新座高校なのかどこなのか。その辺のお考えを聞かせてください。

依田委員長　はい。大変多様な御意見をいただきました。一つ一つ、この後、事務局と話をしていきたいと思いますが、多様な御意見をいただきましたので、関連することで、この際、他の委員から何か御意見があれば、いただいてから事務局の方に話をいただこうかと思います。他の委員の皆様、今の重田委員、主に８点あったかと思いますが、それらについて、何か御意見がございますでしょうか。よろしいでしょうか。はい。それでは、この８点について、それぞれお話をしてまいりたいと

思います。まず１点目からまいりたいと思います。一番のポイントかと思いますが、和光高校の特色、レガシーが生かされていないということについてです。事務局の方から、和光高校の特色やレガシーを案のどういったところに位置付けたのか、説明をいただきたいと思います。

事務局　御質問ありがとうございます。和光高校のレガシーを大切にということは、この委員会の中ではずっと述べさせていただいてきているわけですが、また、多くの御意見も頂戴しましたので、最終的な計画案には次のような形で盛り込ませていただいていると考えております。何より、基本姿勢について、重田委員から改めてお話があったように、新校の設置に当たっては、対象校の特長を生かし、生徒にとってより良い教育環境の整備に取り組み云々となっております。ですので、当然、両校のそれぞれの特長を新しい学校の中に入れ込んでいくべきものであるということを、大きな基本の姿勢として高らかにうたっております。そして、例えば教科指導のところでは、基本方針イに、生徒の個性に応じた多様な選択科目を提供することであったり個々の学力の更なる向上であったり、それを踏まえた具現化アでは、生徒一人一人に寄り添った丁寧な指導といった記載をしております。これらは、和光国際高校が丁寧な指導をしていないというわけでは決してないのですが、和光高校は、本当に生徒に寄り添い、教員が生徒に伴走するような形で、一人一人に寄り添った学習、面倒を見るというところが最大の特色だと捉えておりますので、そうした、生徒に寄り添う姿勢をしっかり表現させていただいたつもりです。同じように、進路指導の中でも、修正がたくさんありましたが、最終的には、基本方針ウの中では、生徒一人一人の進路実現を目指し、生徒に寄り添った指導体制を確立すると、それから、具現化エでは、地元企業や団体等との連携、体験活動や講演会等の実施、具現化オでは、生徒の進路実現を支援するための体制ということにしました。比較的、最初に各学校が提案してきた案では、大学進学とか、国際に関する学科の設置ということもあって、グローバルな活躍をとか海外の大学へとか、そういった記載もあったのですが、それらも踏まえて、生徒一人一人の進路実現に寄り添うべきだということで表現を随分改めさせいただいたつもりでおります。和光高校の、特に教職員と生徒、保護者が協力して創り上げてきた良いところを、新しい学校にもしっかりと吹き込んでいくという意味で、こうした記載をさせていただいたと考えているところです。

依田委員長　はい。重田委員、お願いします。

重田委員　おっしゃっている理念は非常に素晴らしいと思います。それは当然のことだと思いますが、そこに、和光高校に入ってきているレベルの生徒が入ってこられなかったら何の意味もないと思います。就職に関しても、私が前回お願いした件を入れていただいておりますが、そこにそういった生徒たちが入ってこなければ何の意味もないですよね。机上の空論と言うか、理念は素晴らしいですが、全然、統合する意味がこれではないのではないかというのは、いまだに拭い去れないです。

依田委員長　今の重田委員のお話は、先ほどのお話の中の７点目に当たるかと思いますので、７点目の話について、事務局から話をいただこうと思いますが、生徒募集

の在り方についてです。偏差値の違いについてお話をいただきました。和光高校の子供たちは切り捨てるのかという御発言をいただいたところです。まずこの生徒募集、生徒の入試についてのことになるかと思いますが、和光高校の生徒は、どこで学べば良いのかという御指摘もあったかと思います。こうした点について、事務局から、生徒募集の考え方についてお願いします。

事務局　生徒募集の関係については、前回もお答えさせていただいたところもありますが、埼玉県の公立高校の入学者選抜について、市立高校も含め、全て同じルール、同じような内容でやっております。そこには、いわゆる学力検査という当日の試験による結果に中学校時代の様々な活動も加味されて、選抜が行われます。その結果、生徒の合否が決まってくるわけですが、これは、決して最初に何点という得点が決められていたり、あるいは、世に言うところの偏差値みたいなものを県教委が使って選抜しているわけではありません。今の埼玉県の入学者選抜は、そのときに志願した中学生たちが、点数を取ったり自分の持っている調査書の内容によって、基本的には持ち点の上位から選抜することになっています。つまり、そうした結果で、場合によっては世の受験情報誌などが、偏差値いくつといった言い方をしているのでして、私どもとしては、先に入試の難易度を設定して決めているわけではないということになります。ですので、入学者選抜をする上で、こういう層の中学生を取りますということを決めて生徒募集を行っているわけではないということです。結果がそういったところになりますので、これは開けてみないことには分かりません。中学生がこの新校をどのように評価して、どういう目指す希望や夢を持ってこの新校を志願するのか、そこにかかっていると思います。私どもとしては、入学した後の学びの姿勢、考え方について、基本計画案の中に盛り込ませていただいておりまして、その中には、進学一辺倒ではなく、いろいろな学びの先にある職業選択であったり人生の歩み方であったり、そういったところもしっかり生徒に寄り添って、つまずきがあった生徒をしっかり支えて卒業させられるようにと、そうした内容をこの計画の中に、皆さんの御意見を踏まえながら入れさせていただいたというところになります。ですので、現在の和光高校の生徒、そういう層の中学生たちを決して切り捨てるという思いはありませんし、また、入学者選抜はそうした募集の結果ですので、生徒が希望したところにうまく振り分けられ、うまく収まれば良いと考えております。先月発表されました、令和５年 10 月１日現在の中学生の進路希望状況調査がありますが、こちらは来年度生徒募集を行う学校の希望を、現在の中学３年生に聞いたものです。それを見る限り、今の中学生たちが、希望を全て収めるべき学校に出して、数値的にもある程度の数値で収まっておりますので、和光高校の募集停止の影響が極端に大きく出たかと言うと、そういう状況にはなかったと考えております。上手い説明ではないかもしれませんが、以上です。

依田委員長　今の事務局の説明を受けて、ただ、重田委員の発議は重要だと思いますので、少し私の方からもこのお話を展開させていただこうと思います。新校はまだ生徒の募集をしていない状況です。一方で、和光高校は募集停止をしておりますので、来年度、既に和光高校の募集停止の影響が、県立高校だけではないかもしれま

せんが、高校に発生してくることになります。それが、今、事務局から説明があった来年度の進路希望の状況の話になったのかと思います。今年は、和光国際高校は募集を継続していて和光高校は募集をしていないという状況の中で、和光高校で今まで学んでいた子供たち、昨年度までは和光高校に入学をしていた子供たちは、一体どこの学校を来年度目指すのだろうかというところが、重田委員の先ほどの発議の趣旨の一つだったかと思います。そこで今、事務局からは全体として大きな影響は出ていないというお話がありましたが、もう少し具体的にお話をいただきたいと思います。近隣の高校の生徒募集の状況は、昨年度と比べて今年度の募集の状況はどうだったのか、委員の皆様にお伝えいただけると有り難いと思います。

事務局　募集がなかった和光高校の影響というところから考えていくと、和光高校は普通科の高校ですので、普通科の高校で考えていくのが良いと考えます。例えば、荒川を挟んだ向こう側ですと、戸田翔陽高校の募集倍率が例年になく高めになったというのは確かにあります。それから、荒川のこちら側ですと、富士見高校や、少し距離は離れていますが、川越初雁高校など、例年とは少し違う募集の状況がありましたが、だからと言ってそこがあふれ出てしまうような状況ではなく、例年に比べると、この段階での希望者数が増えているという状況はあります。ですので、今、申し上げたところがもしかするとというくらいです。はっきりとしたことはなかなか申し上げにくいのですが、そうなのかなという感じがしています。普通科以外に目を転じていくと、例えば荒川の向こう側では、浦和商業高校や川口工業高校などが、例年に比べると希望者が幾分伸びたということがあります。これも、伸びたと言っても、いわゆるオーバーフローしている状況ではなく、昨年度よりは希望者が多かったということになります。荒川のこちら側ですと、体育系の学科があるふじみ野高校で例年に比べると希望者が増えていたということが、客観的なこととして申し上げられます。

依田委員長　あふれかえるわけではないというのは、簡単に言うと、定員をオーバーしていない状況と理解してよろしいでしょうか。

事務局　はい。

依田委員長　ここまで、少し整理をさせていただいたところですが、重田委員、生徒募集の関係、和光高校の子供の行き先についていかがでしょうか。何かあればお願いします。

重田委員　その学校は少人数制とかそういうことはしていないのではないですか。

依田委員長　事務局からお願いします。

事務局　先ほど挙げた学校は、希望者の変動があったところをピックアップしましたので、恐らく、これまでの和光高校を志願していたような中学生たちが集まるであろう学校には、例えば他に新座高校などもあります。新座高校は昨年度と希望の状況が全く同じ数字でしたので例には挙げませんでしたが、こちらも定員に満たした状況ではない形で希望者が出ています。この新座高校などでは、入学した生徒たちを、少人数学級制ということで、今の和光高校の１年生、２年生と同じように、クラスを多く分けて展開などをしております。他にも、詳細は承知しておりませんが、

富士見高校でも一部の学年で行われていると思いますし、また、こういう言い方はどうかと思いますが、結果的に定員を満たさなかった場合、学校がスタートすると、30 数名というクラスで授業が行われています。こういった学校では、学習につまずく生徒たちが出る場合でも、教員一人一人が目を届きやすくするような教育環境が実現されていると考えております。

重田委員　そういった学校があるということであれば良いのですが、教育委員会からも、和光高校がなくなって、生徒たちの行き場というところで、今挙げられた新座高校などそういったところで、その辺をもう少し強化していくとかそういう御指導はされるのでしょうか。

依田委員長　事務局からお願いします。

事務局　基本的に、今、皆様から御意見を頂戴していることに関しては、新校のことにはなるのですが、もちろん埼玉県全体の高校教育ということを私たちは考えておりますので、そういう意味で、そういった層の中学生が進学するであろう学校は、これまでの和光のレガシーをうまく引き継げるような学校であってほしいと思っていますし、そのために県として必要な動きは行ってまいりたいと考えております。

依田委員長　よろしいでしょうか。はい。では、佐藤委員、お願いします。

佐藤委員　生徒募集の件で、中学校の現状についてお話をさせていただきたいと思います。確かに前回の進路希望状況調査の数についてはそんなものかなというふうに見させていただいております。ただ実際、中学校では今の 10 月、11 月の現状で第一希望を明確にできている状況ではございません。本校で言えば、毎年 10 名から 20 名が和光高校を受検させていただいて、市内の中学校３校でだいたい 30 名前後が受けさせていただいていたかと思います。現在、担任から面談の状況を聞いていると、やはり、本当に和光高校は少人数で丁寧に指導していただいているので、学力的な部分、あるいは少し教育相談的対応が必要な子についても希望してそこで活躍している現状がございました。そういった子たちがどうしていくのかという部分で、今、中学校の方としては、特に和光市内の学校については進路指導を丁寧にやる他の学校を見に行きなさいと、見て良さを確認しながら最終決定をしろということで指導はしているところはありますが、先ほど重田委員がおっしゃったような、そういう子たちがどういうところに行くのかという部分に関しては、是非、県の皆様方には知っておいていただきたいと思っております。特に今週の月曜日に、和光高校の方で授業公開をしていただいて、うちの教頭と職員が見に行ったところ、やはり同じように少人数で丁寧にやられている現状がありました。そんな中で、私も前回、和光高校の丁寧な指導は是非反映をさせていただきたいと発言させていただきましたが、先ほどの説明の中では、個々のという部分で入れていますよというお話はあったのですが、やはりより具体的に入れていただかないと、そのレガシーという部分に関しては、反映しきれないのかなと思ったのも事実です。

依田委員長　ありがとうございました。中学校の現状についてお話をいただきました。これは、新校と言いますか来年度に直接関わる話ですので、近隣の学校、今まで和光高校に通っていた子供たちが、どういった学校に結果として来年の４月に進学す

るのか、私どもの方で、これは事務局というより、私、県教育局県立学校部の高校改革統括監の職として、よく行き先を分析させていただいて、佐藤委員にも良くお話を伺いたいと思います。和光高校にこれまで行っていた生徒が行った学校に対して、和光高校の取組であるとか少人数指導であるとか、きめ細かな取組が展開されるように、これは私の職として、今のお話を承っておきたいと思いますので、これについては事務局からではなく、私の方から、承ったということでよろしくお願いしたいと思います。これについては、重田委員についても、私の方で承知させていただきました。それでは、続いてまいりたいと思います。２番の生徒や保護者のニーズに応えていないのではないか、また、３番の和光高校のレガシー、少人数クラスはどうかということについて、これについては、今のお話の中でほぼ包含されてきたと思いますので、４番目のお話にまいりたいと思います。令和８年度に入学した生徒と和光国際に令和６年度、７年度に入学した生徒の制服は一緒なのかそれとも別の制服になるのかということですが、これについて事務局からお願いします。

事務局　こちらの準備委員会では、来年度、校名について、アイデアを広く県民に募集しまして、それについての御意見などを頂戴するということを予定しておりますが、それと並行して、それぞれの対象校では、新校開設委員会という３番目の委員会が来年度立ち上がります。こちらの委員会は、これまでもお話しさせていただきましたが、教育課程や制服、校歌、校旗、校章などをどうするかということを検討します。今の予定では、設置する学校の校長が委員長、校舎を閉じる学校の校長を副委員長として、管理職が基本的な委員の構成メンバーとなります。その下にそれぞれの学校の教員が、実働部隊としてぶら下がっているというイメージをお持ちいただければと思います。その中で具体の話をしていきます。制服をどうするかというのも、両校で検討してまいります。ですので、今は何も決まっていない状態、白紙の状態です。今の制服を継続するというのもありかもしれませんが、私がこれまで見てきた過去の再編では、新校になるときに合わせて制服を変えるというケースは間々ありました。変えないという事例はなかなか思い浮かばないですが、ただそれは、それぞれの先生たち、あるいは地域の皆さんの声なども含めてなのでしょうが、学校の方で考えていっていただく話になります。校歌も同様です。ですから、どちらかの学校の校歌を歌い続けるという考え方もあるでしょうし、全く新しいものを作っていくということもあります。過去の再編の事例では、新しいものを作ったり、前の学校のものから一部歌詞を変更して、校名が歌われていた歌詞だったのでその校名を新しい校名に歌詞を一部改編すると言いますか、そういった形で、当時作詞をされた権利者の方に了解を取って変更したりとか、様々な事例がございます。ですので、必ずこうなるといったことを私たちも今考えているわけではないということです。制服がもし変わった場合には、令和６年度、７年度、最後に和光国際高校に入った生徒たちは、現行の制服を着続けて卒業していきますが、令和８年度に新校に入学した生徒は、別の制服という可能性もないわけではありません。現にそういった学校に私も勤務したことがあります。

依田委員長　制服と校歌の話が事務局からありましたが、これについて、重田委員、

いかがでしょうか。

重田委員　確かにこれから決めていくことであると思いますが、やはり校歌は、今の和光国際に６年度、７年度に入る生徒にとっては思い入れがあるのではないかと思うので、卒業式には歌いたいと思います。だからそうした方が良いと思いますし、制服に関しても、新しく作って、一時的に両方あるというのは仕方ないことだと思いますので、新しいものに合わせろとなると在校生の負担になるので、それは良くないと私は思います。

依田委員長　今のことにつきましては、御要望、御意見ということで受け止めさせていただいてよろしいでしょうか。今の重田委員のお話につきましては、新校開設委員会の中でお伝えいただければと思います。それでは続いて、重田委員の発議に戻ります。校名についてのお話がありましたが、校名につきましては、引き続き来年度、皆さんに御協議いただくことになりますので、これはまた来年度にかけて御協議いただければと思います。最後ですが、重田委員からあった、このままのスタイルなら和光高校は廃校にした方が良いのではないか、和光国際のままで良いのではないかという趣旨のお話がございました。これについて、まず廃校というものと、今回、教育委員会が統合と言っているものについて、ここの違いがよく整理できていないと言いますか、この会議の中で議論してこなかった部分があるかと思います。そういう意味で、事務局の方から、まず廃校ではなくて統合ということになった考え方についてお話をいただければと思います。

事務局　埼玉県教育委員会では、過去に、いわゆる単独で閉校するというやり方で学校を閉じたことがあります。その際には多くの関係者から、本当に悲しい、つらいというお言葉をたくさんいただいたところです。ですので、その前例を除いては、基本的に本県で学校を再編していくときには、二つの学校を一つにして両方の歴史を生かすという考え方に拠っています。廃校という言い方は言葉としては本当にきつい感じがありますが、学校を閉じるとなったときには、そこまでで歴史が刻まれて、止まってしまいます。いろいろなものを引き継ぐということはもちろんありますが、基本的には歴史を止めることになります。統合の場合は、まさに今こちらで検討している新校がそうですが、両校の歴史はずっとつながっていくと考えております。例えば、法令で定められている様々な諸表簿があります。例えば卒業者台帳、卒業したという証は、永久に残るものです。他にも、旧職員録や学校の歴史を刻む沿革史も、きちんと作って永久に保存することが法令で求められています。ですが、閉校、廃校となると、作られてきたものが教育委員会預かりとなってしまいます。統合の場合には、今回のケースで言うと、設置される新校の方にそういった書類も全て引き継がれることになりますし、それに併せて、生徒の活躍の記録、例えば野球部やラグビー部など部活動の優勝の記録や賞状や楯など、いろいろなものもこういった新校に引き継がれていきます。ですので、形式的にはもしかしたらそんなに違いがないとお感じになるかもしれませんが、私たちの中では両者は全然違うものと考えていて、歴史を止めるのではなく、あくまで歴史はつながっていくと考えているところです。

重田委員　歴史はずっとつながっていくとお聞きしましたが、新校の創立は、和光高校ができた昭和47年ということになるわけですね。

依田委員長　事務局、お願いします。

事務局　これも、学校が最終的にこの辺りをどう数えていくか、カウントしていくかということは、特に出来上がった学校に同窓会がどんな形で組織されるかに拠るのかという感じがします。これまでの新校で、新校になったことで創立年数をリセットした学校もありますし、長い方の歴史を起点として考えるという学校もあります。これは、それぞれ新しい学校ができたときに、関係者の皆さんとともに考えていく形になります。これまでの県立高校では、例えば和光高校が50周年ということで、周年のイベントや行事をやろうとすれば、それは関係者の皆さんと相談して、ここが創立年だからそこから数えて何年目ですよね、だからここでお祝いをしましょうねということを考えることになっています。教育委員会が設置者として何年目というのはもちろん分かっていますが、お祝いをやってくださいとお願いするわけではないので、関係者の中で、どういう節目のときに学校に集まろうかとか学校のことを振り返ろうかということは考えていただきますので、新校になった場合にその後をどういうふうにカウントしていくかというのは、そのとき関係者になられた皆さんの声で決まっていくと考えています。

重田委員　よろしいでしょうか。

依田委員長　どうぞ。

重田委員　和光高校のスタートからつながっていくということであれば、同窓会は続けても良いかと思いますが、一方で、和光高校のレガシーはどこにも生かされていないので、やる意味がないと私は思っています。ですから、正直個人的な見解なので数名の卒業生に確認しましたが、学校がなくなるのであれば、52期生で和光高校の歴史は閉じてもらって良いと思っています。その方がきれいさっぱりすると思います。一方で、和光国際がせっかくあるのに、全く同じ内容で焼き直したものなのに新しい学校にされて、30数年の歴史がつぶされるんだったら、何も新校にしなくても和光国際のままでやったら良いだけのことだと思います。校名も変えずに和光国際で、外国語科を国際科に変えて少しリニューアルしましたくらいで良いのではないかと思います。そんなややこしいことをしないで、和光高校は閉じてもらった方が。私が今、思っているのは、和光高校の跡地の一部を、どこかにお願いして、そこにモニュメント、記念碑を建てたいと思っているんですね、同窓会の費用で。同窓会は引き続き継続して、ホームページなどを作ってやっていこうと思っています。何も無理やり一緒にしてもらう必要は一切、そんな御配慮はいらないと思っています。卒業生としては。

依田委員長　はい。今のお話は、和光国際高校をどのように新校につないでいくのかということも含めてのお話かと思います。外国語科が国際科に変わるということがありましたので、ここでもう一度整理したいと思います。今の和光国際高校の外国語科と新校の国際科、どのような魅力化を新たに図ろうとしているのか。どのような変化をもたらそうとしているのか。今の重田委員のお話は、そういうことも大き

な課題として浮き彫りにした部分もあったかと思います。まずは事務局から、現在の外国語科と新校の国際科の違いについて、端的に説明していただいてよろしいでしょうか。

事務局　両者の違いは、学びの違いということになると思います。外国語科というのは、県内に７校ございますが、英語を中心に、言語教育に力点を置いた教育課程です。それに対して国際科は、本県では初めてになりますが、語学をツールとして、国際的な関係、国際的な文化、あるいは我が国の文化も振り返ることにもなると思いますが、経済も政治もそうですがいろいろつながりがあって、国境がなくなってくるようなこの今の時代にあって、日本人として、世界でも国内でも活躍ができる、そういった素養を身に付けるために、言語教育にプラスして、国際情勢など様々なことを学んでいくといった、これまでの外国語科に更に世界を広げていくような、そんな形で教育課程を編成していくことを予定しております。

重田委員　それは非常に良い方向だと思います。そのために、単に和光国際の中の学科を国際科にしました、リニューアルしましたということで、和光国際の歴史を続けていった方が、今までの和光国際の卒業生にとっても良いと思います。その点について、山口委員にも柴田委員にも御意見をお聞きしたいと思うのですが。

依田委員長　重田委員からの御要望なのですが、いかがでしょうか。

山口委員　私が和光国際高校の２期生でして、開校２年目に入学しました。入った理由というのは、実家がすぐそば、歩いて５分のところだったからです。和光国際の同窓会はほぼ動いてはおりません。ただ、愛校心のある子たちも結構いるのも間違いないと思います。ただ、私自身に愛校心があるかと言われればそれほどはありません。先ほどおっしゃったように、リセットしても良いのかなと正直考えております。私が残る必要もないというのも正直考えておりまして、今、中心になっているのは 20 代の若い子ですが、20 代の子に会長職をそろそろ譲ろうかなと正直考えております。ですので、歴史云々言われますと、私の方は特には何も考えていないというのが正直なところです。これからの人間につくっていただくでも全然構わないと思います。先ほどの、和光高校は廃校で良いという点については、これは私は正直反対です。是非とも、統合は統合で良いと思いますし、新しくゼロから始めるということでよろしいのではないかと。ただ、先ほど出ました少人数クラスに関しては、レベルの低い高いに関係なしに、和光国際の先生もとても丁寧に教えてくれていたと私は思いますし、なんと言えば良いか分かりませんが、統合でまたゼロから始める、そしてその学校は、その学校を選んだ子たち、今の中学生、これからの子たちがつくっていけば良いのかなと正直私は感じます。

柴田委員　私は息子が昨年度卒業しまして、34 期生だったのですが、多分、今の若い子の方が和光国際高校に関して学校愛をすごく感じていて、この統合の話が出たときも、僕たちの歴史はどうなるのでしょうかという話が、正直出ていました。なので、ゼロからのスタートでも良いと思うのですが、彼らの意見も尊重したいというのが保護者としてはあります。憶測で申し訳ないのですが、重田委員の御意見のポイントは、学校を閉校にしたときに、今まで和光高校が培ってきた賞状なりトロフ

ィーなりそういうものもありますし、あとは、在籍証明を取りたいときに、一体どこにアクセスすれば良いのかとか、そういうところがクリアになっていないので、そういう話になっているのかと思います。ですので、閉校になったときの事務処理について、過去に閉校になった事案があったかと思いますが、閉校になった学校に在籍していた方々の手続きは、現在どうなっているのか、そういうところを具体的に御説明いただかないと、多分認識がずれていくのではないかと思います。

依田委員長　大変大切なことだと思います。私も長い間、学校の統合については仕事として携わってきまして、先ほど閉校とか廃校とか、また統合との違いについて事務局からあったかと思いますが、基本的に統合というのは、その学校とその学校が統合されて、学校の沿革史などでもつながってきますので、全ての書類が新しい学校に引き継がれて、生徒が卒業証明を欲しいとかそういったときには、新しい学校に行って、自分の昔の学校の生徒としての証明をもらうことになります。新しい学校が両校の沿革を引き継ぐ形です。閉校や廃校ということになると、先ほど事務局からあったように、教育委員会がその学校の書類を全部管理することになります。ただ、教育委員会で管理すると、この辺の学校だとそんなに遠くないかもしれませんが、場所が浦和にありますので、大分遠いところもあります。そういったところについては、教育委員会ではなくて、どこか違うところに教育委員会が事務をお願いすることになります。例えば、この学校を卒業された方が卒業の証明をお願いに来たときには、この学校とは縁のない学校で、その方とは関係のない職員が、教育委員会の事務を代行してという形になってしまいます。ですから、閉校とか廃校になれば、トロフィーなどもどこが管理するのか、これは全く分かりません。教育委員会もどこまでそれを持てるかというと、スペースの関係とか諸々あると思いますので、場合によっては、関係者の皆さんでお持ちくださいということになってくる可能性はあるかと思います。ですので、先ほど重田委員から、和光高校の記念になるようなものをというお話がありましたが、統合になれば、当然新しい学校が、和光高校のレガシーや何か思い出に残るようなものを、これは和光国際もそうですが、引き継ぐことになります。場所を和光国際の場所につくるということになっているだけで、和光高校が廃校になると、もしかすると和光国際も廃校になる可能性があるということです。そうすると、結局両校の伝統のものをどこが管理するのかという意味では、新校をつくるとなったときには、関係者の皆さんで話し合ってお持ち帰りくださいといったことになりかねません。そういった意味では、新しい学校ができれば、両校の沿革が新しい学校に引き継がれて、新しい学校の中に両校の伝統を生かすという議論も、新しい学校の中で、元の学校と話し合いができるということなってきます。難しい話になってしまったかもしれませんが、御理解をいただけましたでしょうか。

重田委員　在籍証明などはそれでもちろん構わないと思います。トロフィーとかそういうものは、例えば同窓会で全部預かって、今はトランクルームでも何でもあるので、そこで預かったって構わないと思います。またおっしゃるように、そのとき活躍した卒業生にあげる、いらないとは思いますが、そういう形でやれば良いことだ

と思います。廃校かどうかで、和光高校を廃校としたら和光国際も一緒に廃校になるというのはおかしいと思います、今おっしゃった話は。

依田委員長　新校をつくるということが決まっている段階ですので、なかなか難しいことなんですね。

重田委員　ですから、新校でなくて良いと思うのですが。どうしても新校をつくらないといけないのですか。

依田委員長　これについては、県教育委員会として、まず新校をつくるということで、委員の皆様には大変恐縮ではありますが、決定をさせていただいた上で、その新校についての御協議をいただいてきたところでございます。ここの部分については、重田委員には御不快な部分があるかと存じますが、大変申し訳ないですが、御理解を賜りたいと思います。

重田委員　決めたことを撤回してもう一回やり直したら良いだけのことではないんですか。

依田委員長　これについては、大変申し訳ございません、是非御理解を賜りたいと思っております。

重田委員　それは理解できないですよ。だって、もう一回審議し直したら良いだけのことではないんですか。

依田委員長　私どもとしては、和光国際高校も和光高校も、新校としてより魅力的な学校に、この先の生徒減少の動向も踏まえて、より魅力的な高校をつくっていきたいということから、このような形を取らせていただいております。

重田委員　分かりました。それであれば、私がお願いしている少人数制と、それから、偏差値という言い方が嫌でしたら、和光高校に今いる層の子を、面接なり推薦なりで入れるような新しい学校にしたら良いじゃないですか。今のままでは単に和光国際の焼き直しでしかないじゃないですか。全然新校ではないですよ。どこが新校なんですか。どこか変わっていますか。おっしゃったように、国際的な人間をつくるという内容に変わっただけで、外国語だけではないというのは分かりますが、全然変わっていないですよ。どうしても新校でやりますと決めたのであれば、和光高校のレガシーを尊重して、少人数制のクラスを作って、考え直したら良いのではないですか。こんなの納得できませんよ、私は。

依田委員長　重田委員がおっしゃっていることは、少人数制を導入させたいということでしょうか。

重田委員　もちろん少人数制と、今いる和光高校の生徒たちのレベルが入れる学校にしてくださいということです。

依田委員長　１点目の少人数制のクラス展開については、これはまた今後の議論になります。教育課程がこれからですので、教育課程の検討の中で、どのような学びをつくっていくかということは今後になってまいりますので、重田委員の意見として、これは新校開設委員会の中でも議論いただきたいと思います。２点目につきましては、これは大変申し訳ないですが、先ほど事務局からあったように、私どもの方で、生徒を選ぶということが、学力面において生徒を選択するということができる入試

制度になっておりません。ただ、一つ申し上げたいことは、生徒募集の中で、例えば前回話をいただいていたかと思いますが、外国にルーツがある子など、様々な個性を持った子供たちをどうするかというのは、これは入試制度の中で検討が必要だと思っておりますので、この部分については引き続き、入試制度になると新校とか和光高校とか和光国際高校とか具体の高校ではなく県全体の入試制度に関わってくることになるので、県全体の入試制度の中で、そのような観点の入試制度がどのように取り入れられていくのか、私どもとして尽力していきたいとは考えております。重田委員には大変恐縮でございますが、是非、新校の設置、またより良い魅力ある新校づくりに、引き続き今後とも御協力、御理解をいただいて、御協議の中でお話を賜ってまいりたいと思っております。

重田委員　もちろん協力してまいります。私に申し訳ないのではなくて、入ってくる学生さんに申し訳ないんですよ。私はどうでも良いんですよ。そうですかと聞き流せば良いのですから。そうではなくて、そういう子たちをどうやって入れるのかという努力をしてほしいんですよ。推薦制度とかいろいろなことを考えて。学力の差を選べないというのであれば、推薦制度とかそういうのがあるじゃないですか。ないんですか。

依田委員長　今申し上げたように、いわゆる外国籍云々のようなことについては、県の教育委員会として協議をしてまいりたいと思っております。そこは、重田委員がおっしゃったようなことのとおりです。

重田委員　そうしたら、和光市の中学生たちの意見と言いますか要望を聞いて、例えば大和中や和光第二中はこういう子を推薦しますということでやっていったら良いのではないかと思うんですが。

依田委員長　入試制度全体の話なので、そこについては今まさに県の教育委員会の方で入試改善を図っているところですので、逆に校長推薦をなくした方が良いとかいろいろ意見が実はあるんです。様々な意見がある中で検討していくことですので、御意見として受け止めさせていただきたいと思います。

重田委員　この場で回答できないと思いますので。

柴﨑副委員長　校舎を閉じる学校の校長として、少しお話しさせていただきたいと思います。和光高校は本当に長年、50年以上にわたって、多くの方々、地元の方々に支えられてこれまでやってまいりました。昨年、校舎を閉じるという発表があって、惜しむ声を本当にたくさんいただいております。中学校もすぐ回ったのですが、中学校の先生方からも残念だという声をいただいております。重田委員のお話の中で、やはり和光高校のレガシーを引き継ぐという部分が私は一番大事な部分だと捉えております。恐らく、同窓会の方、卒業生の方、ＰＴＡの方、重田委員のおっしゃることを共通で皆さん、今後の不安も含めて強く思っているのではないかと思います。一方で、先ほど事務局から、統合はもう決まっているのでということで、何とか新しい学校を良い学校にしていかなければならないなと私自身、責任を感じているところです。レガシーに関しては、先ほど事務局からも説明がありましたが、教科指導や進路指導の部分で、一人一人に寄り添った丁寧な指導ということで、基本

計画には盛り込んでいただいたのかなと思っております。ただ、この一人一人に寄り添ったという部分ですが、これはまさに今、私たちが行っている和光高校の部分で、もう少し、現状はどういう状況なのかということをお話しさせていただきたいと思います。この、一人一人に寄り添った、の裏にあるのは、和光高校の生徒と教職員の信頼関係が支えになっております。生徒たちは、非常に明るくて人懐っこい子が多いです。一方で、基礎学力がきちんと身に付いていないで入ってくる子もいます。それから、いろいろと生活面ですとか、問題を抱えている子が多いです。そういう子たちに対して、教員が全力で、そのときに少人数教育ということが出てくるわけですが、基礎・基本の徹底を図っています。学習指導について、どうやったらこの子たちに基本的なことが身に付けさせられるかということで日々研鑽を重ねています。先ほど佐藤委員からもお話しいただきましたが、先日も、県の指導主事を迎えて授業改善のための研修を行ったばかりです。それから生活指導です。本当にいろいろな問題を抱えている子が多いのですが、そういう子たち一人一人に寄り添って、丁寧に話を聞いて、御家庭とも連絡を取りながら指導しています。生徒たちに対する先生たちの眼差しが非常に温かいです。そういったところも、新校に引き継いでいかなければならない和光高校の重要なところだと思っています。眼差しが温かいというのは、なかなか目に見えないと言いますか無形の財産ですが、制度のような有形のものも引き継いでいかなければならないですが、一方でそういう無形の部分、言葉では伝えていきづらい部分もありますが、そういった部分も含めて引き継いでいかなければならないと思っています。本校の自慢は、本当に教員の指導力が高いというところです。50 年間培ってきたものがあって今の指導力につながっているのだと思いますが、先日も本校の教員が県の優秀な教員の表彰を受けまして、昨年も別の教員が表彰を受けました。２年連続で表彰を受けたのは本校ともう１校だけです。非常に高い指導力を持った教員がたくさんおりますので、和光高校で培った指導力を今後の新校にも引き継いでいかなければならないと思っています。ということで、基本計画の中に、文言としては一人一人に寄り添ったという形で入れていただいていますが、それが、より実を伴ったと言いますか、より具体的にしっかりと引き継いでいかなければならないと私は思っております。あと先ほど、対象校が保管する物品等の保存の話がありましたが、本校にもたくさん品物がありますので、是非、保存に関してはいろいろな形で御配慮いただければと思います。

鈴木副委員長　大きく２点、お話ししたいと思います。１点目、和光国際の継続か新校かということですが、これを決めたのは教育委員会ですが、個人的に校長としては、新校になった方が良いと思っています。私は 1998 年から６年間、ここで英語を教えていましたが、そういう意味で、県立高校の中で一番好きな学校に最後にまたここに帰ってこられて本当に良かったと思っています。先ほど山口委員がおっしゃっていましたが、私が教えたのは、13、14、15 期生辺りですが、大きな反応があるかなと思いましたが、数件、外国語科はなくなるのですかという問合せがありましたが、そんなに大きな反応、新校になるんですかと大騒ぎになることはありませ

んでした。先ほど山口委員がおっしゃっていたとおり、この歴史を途切れさせるなとかそういう動きがあるわけではないということです。もう１点は、新校になるということで教職員が非常に夢を持っています。この前も研修会をやって、各教科で、国際社会で活躍できる人材を育成するためにどんな教育をしていく必要があるかを話し合いました。音楽、比較文化、宗教学など、非常に夢を見て語っています。新校になるんだということがモチベーションになっています。この二つの理由から、私は新校になった方が良いと思います。もう１点、入試のことですが、これは学校関係者でないと、学校が、うちの偏差値こうですよと言っているように見えてしまうのですが、実は全然そうではなくて、要は倍率です。外国語科の倍率というのは非常に不安定で、普通科は安定していますが、外国語科は時代の流れによってなど非常に不安定です。理系が伸びたり、英語は当たり前だから良いのではないかということで下がったりします。私が来た令和３年度の外国語科は 1.08 倍ということで大ショックでした。80 人中 82 人くらいしか志望しなかったということがあり、それからみんなでいろいろ宣伝したりして少し安定、盛り上がったのですが、非常に不安定です。何が言いたいかというと、ある意味この国際科になるということは、私からしたらギャンブル、賭けです。国際科はよく分からないからやめようとなって、80 人のところに 60 人しか集まらないという可能性もあります。県教委は、募集人員を割ったら全員入れなさいと言っていますので、全員入ってきます。これが３年続いたら、そういう学科になります。先ほど重田委員は、子供たちはどこへ行くのかと心配されていましたが、そういう子たちも確実に入ってきます。３年間 60 人しか集まらなかったら、そういう学科になります。ある意味それは、私も愛する学校ですから、そうしたくはないしそのために良い学校をつくりたいと思っていますが、学校は水物で、そうなったらそうなります。そこは是非、御理解いただきたいと思います。

依田委員長　それでは、まだ御発言をいただいていない委員もいらっしゃいますので、時間が過ぎていて大変恐縮ですが、布川委員、何かございますか。

布川委員　私もそこまで深くこだわりがあるわけではないので、和光の良いところを入れ込んだ新校をつくっていただけるということであれば、是非このまま進めていただきたいと思っています。あと、卒業した息子と卒業証明書を取りに行くという話をしたときに、卒業証明書を和光国際の場所に取りに行けば良いんだよと話をしたら、それなら良いねという程度の反応だったので、卒業証明書をこの場所で発行していただけるというところは残していただけると、やはりみんな卒業生も有り難いのではないかなと思います。あと、欲を言うなら、学力の低い子でも受け入れてもらえるような、学力の、点数の基準が学校ごとに確かあったと思うので、それを、学力の高い子の基準と低い子の基準の二つを設けたりして、それぞれのクラスをつくるなどがもしできるのであれば、大きく入試制度も変えずにできるのではないかと、それができたら良いなと希望しております。

依田委員長　重田委員とのやりとりの中でもありましたが、なかなか点数というのがないんですね。ですので、なかなかその部分については、先ほど事務局が説明した

ように、また今、鈴木校長からもあったように、倍率という考え方で、倍率が定員に届かなければ全員が入れますということで捉えていただければと思います。それが現状の入試制度なんですね。そこについては、県教委としても、和光高校にこれまで来られていたお子さんが、決して県立高校に入れないことがないように万全を期しますので、来年度も含めて、私どもでしっかり見ていきますので、そこについては御安心いただければと思います。中川委員、何かございますでしょうか。

中川委員　本日は、皆様それぞれの立場から御発言されていたと思いますので、私も、基本計画の５ページ目の 10 付随する事項の跡地の利活用の中で、和光市と協議しながらという文言が初めて記載されましたので、その点について少し触れさせていただきます。和光高校の跡地の利活用につきましては、和光市の議会においても御質問をいただいている経緯があります。ただ、和光市としましては、今は和光高校にまだ在校生もいらっしゃいますので、今後の利活用の検討については、まだそういったことは積極的に検討する段階ではないのではないでしょうかと回答している状況です。跡地の利活用につきましては、今後改めて御相談させていただければと思います。

依田委員長　事務局からいかがですか。

事務局　当然、しっかりとその辺りは、地元の市町と協議をしていきたいと思っておりますが、今のところは６校全て同じような表記で、このような形にさせていただいておりますので、もし市側の方から御要望等がございましたら、お申し付けいただければと思います。

重田委員　それに関連してです。跡地利用は令和８年度以降ということだと思いますが、今のお話を聞くと、これは県が主体になってやるのではなく、市が主体になってやるわけですよね。

依田委員長　事務局からお願いします。

事務局　県有地の利活用につきましては、県の財産ですので、まずは、県としての利活用が、和光高校ではなくなるわけですが何かできないかということを考えます。要はオール県庁でまず考えて、それでなかなか、といったときには、地元市町の方に協力していただいてきた学校ですので、地元の和光市に、どうですかという形で照会させていただくという段取りになります。和光市と、という表現になっておりますので、そういうふうにお読みになったのかもしれませんが、まずは県として考えていきます。

依田委員長　それでは、羽田委員、本日の協議を振り返っていただいて、何かございますでしょうか。

羽田委員　新しい学校をつくるという考え方で発言させていただきます。和光国際高校と和光高校から新たな学校をつくるということで、国際的にというイメージは伝わってくるのですが、もう少し具体的に、どういうカリキュラムにしてどういう授業展開にしてというところまで、そろそろ検討して頭出しくらいはしていかないと、なかなか抽象的な部分が多すぎて、議論が進まないように感じました。少し大学の状況を御紹介しますと、大学においても学生の募集は非常に苦しい状況でして、県

内にある大学はどこもジリ貧です。様々な職員の研修会をする中で見えてきたこと、これは大学ジャーナリスト、予備校などいろいろなところからデータをもらって検討した結果ですが、この間も東京の英語に強い伝統的な大学が潰れましたけれども、一つの資格や一つの技能を追求している大学は今、ガタガタと崩れて、ものすごい勢いで廃校に向かっているというデータがあります。どういうのが伸びているのかと言いますと、例えば、栄養士の資格が取れます、教員の資格が取れますといったことを全面的に打ち出すよりも、もう少し、いろいろなことにフレキシブルに対応できます、こういう人づくりをしていきます、だから学んでみてくださいということを打ち出している大学の方が人気を集めている状況があります。ですので、和光国際は正直、今まで英語に強い学校という印象がありましたが、今やＡＩがあれだけ活躍していますから、英語が話せてなんぼの世界になっていますので、もう少し人づくりという観点で考えていく必要があると思います。どこどこ大学に何人入りますとか英検何級が取れますとか、そんなことを打ち出して生徒募集をしても、多分、そういった潰れた大学の後を追うような形になってしまうような気がします。そして、入学者選抜のところももう少し議論をして、留学生の呼び込み、そして外国籍の生徒も呼び込み、地域の多様な生徒を呼び込むということは、要するにキーワードは多様性だと思います。ですから、その選抜の方法も、いろいろな観点で選抜をすることをきちっと表明すべきだと思います。そういった中で、先ほど偏差値という言葉がありましたが、あれは日本だけが使っている、しかも受験産業だけが使っている数字であって、悪しき慣習ですよね。グローバル社会で偏差値なんて全然通用しません。留学生に偏差値いくつですかと聞いても答えられるわけありません。ですから、そういう基準でもって高校を選ぶとか進学させるとかというのは、これからの時代においては全然合わない考え方ではないかと思いますし、仮に偏差値 62 と言ったとしても、全員が 62 であるはずはないので、70 を超える子もいれば 40 台の子もいるでしょうし、幅があるということです。ただそれでは分かりづらいから、この学校は偏差値 62 ですとかこの大学は偏差値 50 ですとか言うのですが、うちの大学もそうですが、ものすごく優秀な子から、もう本当に大変な学生も多々います。そういう中での教育を展開していくというのが、これからの社会に求められる教育なのではないかと思うので、余り偏差値だけでどうこうということではなく、多様性を受け入れて多様化した教育をやって、子供たちの多様な進路に寄り添って丁寧にやっていくということをしっかりと表明していくのがよろしいのではないかと思います。

依田委員長　ありがとうございます。確かに、基本計画についての御意見をいただいているので、どうしても大まかな話になってきます。羽田委員からそろそろというお話もありましたが、具体的な教育課程については今後、しっかり詰めていきたいと思っております。多様化のお話などを踏まえまして、新校開設委員会の中で、今後しっかりと詰めてまいりたいと思います。この際ですので、委員の皆様、これだけはということがあれば御発言いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。時間を過ぎてしまい大変申し訳ございません。本日の協議は以

上で終了させていただきたいと思います。挨拶のときにも申し上げましたように、当初の予定ではこの３回目、本日がこの基本計画の案について御意見をいただく最後だと考えております。本日いろいろお話をいただいた中で、事務局の方で本日いただいた御意見を踏まえて、最終的に基本計画の最終案を作らせていただきたいと思っておりますが、これは、私と副委員長の両校長に、最後の文言修正など細かい点も含めてお任せいただいてもよろしいでしょうか。委員の皆様の中で御反対という方がいらっしゃればお願いします。よろしいでしょうか。

（了承の声）

依田委員長　大変恐縮でございます。それでは、委員長、副委員長に最後のまとめをお任せいただいたということで、本日で基本計画案についての協議を終了させていただきたいと思います。先ほどお話しさせていただいたとおり、この後、来年度は新校の校名などについて、皆様から御意見をいただきたいと思っておりますので、引き続き、来年度にかけてもよろしくお願いしたいと思います。